

「おかえり」で繋ぐ平和のバトン

竹鼻中学校 3年 近藤 紗羽

「おかえり。」

この言葉は、いつも私が学校から帰ってくるたびに、祖父母が欠かさずかけてくれる言葉です。以前の私にとって、それは明日の朝が来るのと同じくらい、当たり前のことでした。

しかし、ある日祖父母の話聞いてから、その当たり前が崩れました。平和について考えたいと相談した私に、祖母は話しました。

「私は小さい頃、満州にいたから、空襲とかは体験してないんだよね。食べ物もそんなに困ってなくて、苦しくはなかった。」

祖母は父親の仕事の関係で満州に渡っており、そこには家族の穏やかな「普通の暮らし」がありました。終戦と分かったら、祖母と家族は無事に日本へ帰ることができました。その話を聞いて私は、辛い目に遭ってなくてよかったと心の底から安心しました。

一方で、日本に残っていた祖父の記憶は、さらに鮮烈な「飢え」の色に染まっていました。祖父の父、つまり私のひいおじいさんは、満州へ戦争に行きました。働き手を失った家には、食べる物が十分にはありませんでした。

た。祖父は私に訴えるように言いました。

「このくらい小さい麦では足りなかったから、さつまいもなどを食べて、かき増したの。」

学校で戦争の悲惨さについて学習しているものの、私の心に響くものがありました。その次に祖父は話しました。それは、学校へ持っていくお弁当の話についてです。当時は、お弁当を持参して食べていたそうです。食べるものに事欠く暮らしの中で、祖父の母は、お弁当の箱にだけは、一粒一粒が光るような「真つ白な米粒」を詰めてくれたそうです。それは、母親が必死にかき集めた、精一杯の愛情と誇りでした。ふと運動場を見渡せば、お弁当を持ってくることでさえ、空腹を紛らわすに気をそらすために、ただ走り回って遊んでいる友達がいきました。その光景を横目に、真つ白なご飯を口に運んだ祖父。その胸にあつたのは、「異国の地で戦う父を待つ、切実な祈り」だったのだと思います。

その祈りは、奇跡的に届きました。満州へ行ったひいおじいさんは、激動の時代を生き抜き、無事に日本へ帰ってきてくれたのです。その後、80歳を超えるまで長生きし、家族に囲まれてその生涯を閉じました。一度はバラバラになり、明日さえ見えなかった家族が、再び「おかえり」と言い合える日々を取り戻すほどの命のリリースがあつたからこそ、今、私がここに存在しています。

す。

そんな祖父と祖母は、今、私が学校から帰ると、いつもやさしく「おかえり」と言ってくれます。私は、その声を聞くと、心の底から安心します。以前の私にとつて、それは明日の朝が来るのと同じくらい当たり前のことでした。でも、2人の物語を知った今、私は気づけました。大切な人が扉を開け、それを誰かが笑顔で迎える。この何気ない一言が交わされる日常こそが、祖父母が、そしてひいおじいさんたちが命がけで守り抜き、私へと繋いでくれた「平和の正体」なのだ。

祖父母から託された平和のバトン。それは単に「戦争をしない」という誓いだけではありません。大切な人に「おかえり」と言い、言ってもらえるこのささやかな幸せを、次の世代へと大切に守り継いでいくことです。私は、このバトンの重みを胸に、まずは今日、家に帰った時に精一杯の声を届けたいと思います。「ただいま。平和を守ってくれて、本当にありがとうございます。」と。

今日、この会場にいらっしゃる皆さんも、どうか家に帰ったら、大切な人の「ただいま」や「おかえり」の声に、耳を澄ましてみてください。そこには、かつて先人が命がけで取り戻した、最高の平和が宿っているはずで